



TITLE:

人文 第27号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第27号. 人文 1983, 27: 1-36

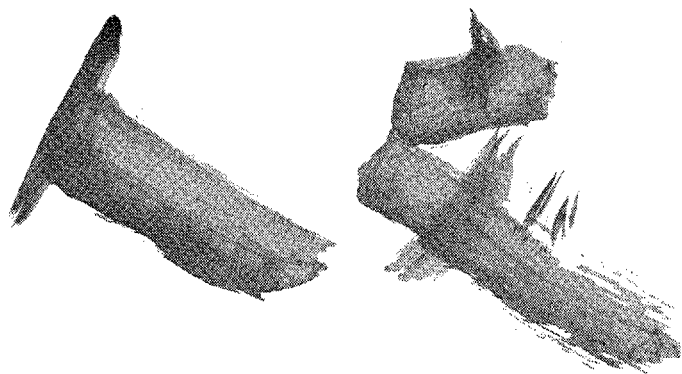
ISSUE DATE:

1983

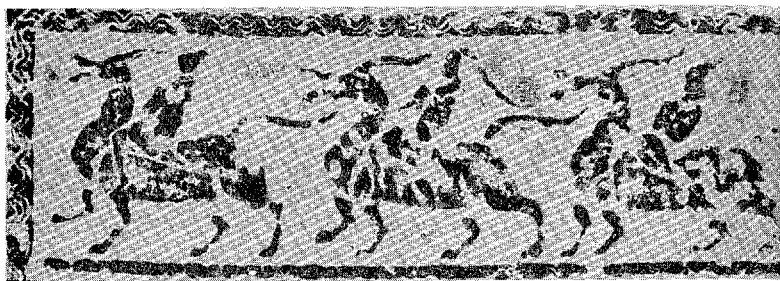
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57153>

RIGHT:



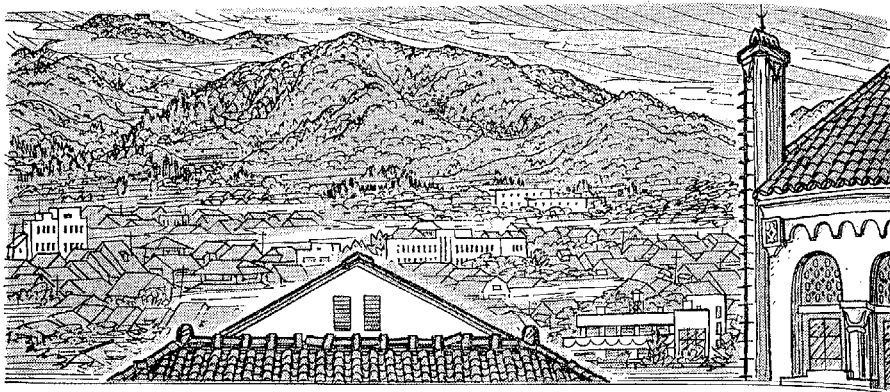
第二七号



1983

京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X



人 文 第二七号

1982年6月—1982年11月

も く じ

| | | | |
|---------------------------------|--|--|----|
| 随 想 | 大西洋のポートビープル 矢野仁一の著書とテレビ | 多田道太郎 竹内 実 | 2 |
| 講 演 | 夏期講座 西鶴の文体 クルト・ネットー「日本鯨山編」 曹雪芹と「紅樓夢」 裴灌「嵩岳少林寺碑」 反キリストと中世の論理学 モンテスキュー「法の精神」 開所記念講演 志士と官僚 鏡の国の孫悟空 賈金のはなし | 久保 由美 吉田 光邦 井波 陵一 磯波 護 岩熊 幸男 樋口 謹一 佐々木 克 荒井 健 浅田 彰 | 6 |
| 本 の う わ さ | 竹内実「中国喫茶詩話」(角山)・山田慶児「科学と技術の近代」(岩熊)・柳田聖山「ダルマ」(井狩)・「吉田光邦評論集」ⅠⅡⅢ(浅原)・「五四運動の研究」(古學)・徂永光司編「中国中世の宗教と文化」(田中) | | 16 |
| 共 同 研 究 の 話 題 | 対雪二首(李義山七律注釈班) 幻の辞典を探す(目錄学の諸問題班) 黄帝内経太素(古代中国の科学班) | 荒井 健 尾崎雄二郎 赤堀 昭 | 24 |
| 旅 | 海の風景(井狩編介)・日本道士九名中国を行く(菱谷邦夫)・パリの小学校(阪上孝)・クシャーン学会のこと(桑山正進) | | 27 |
| 書 い た も の 一 覧 | 叙勲・計報・人のうごき(22)・外国人研究員・招へい外国人学者・外国人共同研究者・外国人研修員(23)・講演会(31)・お客さま(32) | | 33 |

大西洋のボートピープル

多田 道太郎

カナダ大西洋岸にアカディアというフランス領の国があった。モンクトンという都会（人口六万）が今もあって、アカディア文化の中心である。

その大学から話に來てくれということで、モントリオールから飛んだ（飛行、一時間）。聴衆は大学の先生ばかり数十人、大へん熱心だった。ラジオカナダから録音に來たりして、日本文化にたいする興味は急にたかまっているようだった。

あと雑談になって、子供は何人か——ということになり、娘一人と言うと呆れられた。アカディアの人はむかしから少なくとも五人、多ければ十人以上の子供を作った。子供が大勢いるということだけが、イギリスに対抗してフランス文化を守ることができる、そういうところに追いこまれていたのである。

モンクトン (Moncton) という名前も皮肉だ。フランスをやったつたイギリスの將軍の名前だからである。ただし、フランス系の書記が長年にわたって書き写しているうち Monckton のKを落してしまった。ひそかな復讐だったろうか。

アカディアの人びとは亡国の民である。フランス植民者はイ

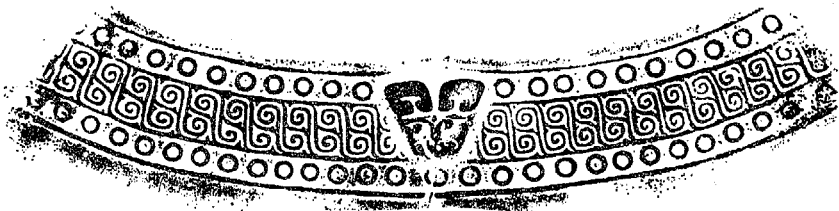


ギリス植民者に十八世紀を通じて徹底的にやられてしまった。思想的には、フランス重農主義がイギリス重商主義に駆逐されてゆく過程ともいえよう。モンクトン大学の資料館には、フランス植民者が涙と共に家族と別れ、大西洋のボートピープルとなつて行く図を描いた大作がのこっている。

大西洋を流れ出て、或る者はボストンへ漂着した。他の者は生命からがら、イギリスに、フランスに着いた。しかしイギリスはもちろん、フランス人もボートピープルの定住をゆるさなかった。唯一の例外が、ブルターニュのベル＝イル＝アン＝メールである。「沖の美しい島」という美々しい名を持つこの島は、今もアカディア難民の住居となっている。ブルトンじしん、少数民族である。島の住民は、少数民族の中の少数民族として、二百年間、くらしてきた。ことばも風俗もちがう。彼らの故国が今は亡い仏領カナダである。

大西洋を南下して合衆国南部ルイジアナまで漂着した人々もいる。ルイジアナ州には今なお、フランス語をしゃべる貧しい漁民たちがいる。

ニュ・オルリンズのチュールン大学はラフカディオ・ハーンの文書蒐集で知られている。このコレクションで私は「ケーディアン料理」という一冊を見つけた。フランスの難民の料理がこの地に定着してケーディアン（アカディアンのなまり）と呼ばれていた。ハーンはこれに異様な興味を寄せ、一冊の本を書いた。書きおわって、日本へ旅立ったのである。ハーンもまた、ヨーロッパから追放された難民の一人だった。



矢野仁一の著書とテレビ

竹内 実

書庫から借用したまま、ながいこと放置してあった矢野仁一著の本のうちの二冊を、昨年の暮れになって、ようやく机におき、読んだ。二冊は同一の書名で、副題が異なる。

『現代支那概論』動かざる支那・動く支那。

現代中国を研究対象とする先行者が、このように対象を二つの側面に区分している。この発見は、わたしに親しみの念を抱かせた。

不動の部分を記述するにあたって、かれは中国の社会を士と庶民に二分し、前者は政治を遊戯とも職業ともしているが、後者は政治になにも期待しない。納税も政治による掠奪を免かれるために支払うにすぎない、といっている。

そして、この図式を記述するにあたって、清末の動乱の当時、北京にいて見とどけた政治の変転をのべている。辛亥革命なるものは、矢野仁一にとっては、きょうの午前中のできごと、ともいうべき事件であった。

そのためか、なぜ共和制をとったのか、なぜ五族共和をとなえたのか、清末の動乱と新しい共和国のあいだをつなぐ線はな



い、と指摘している。おそらくこれに反論するのは容易であろう。だが、このように指摘する着眼はわたしには新鮮であった。

動向を記述するにあたっては、もっぱら外蒙古、内蒙古、チベット、新疆、雲南といった地域の帰属に視線を注いでいる。かれの立場は、これらの地域が共和国に帰属するのが当然とかがえる考え方にたいし、疑問を呈するものである。

年があけて、テレビで放映されたチベットの記録映画を見た。制作はイギリスであった。歳末の読書の印象がまだ胸のなかでくすぶっていたから興味をそられた。チベットの現代史の諸事件が、これほど鮮明に記録されていたとは知らず、驚歎した。数日して、吉田富夫とあったとき、かれもわたしと同様、途中からみていて、驚きをかくさなかった。研修員のジェレミー・バーメーにきくと、かれもかつてイタリアかどこかでこのフィルムをみており、たしかに当時の実写であることを確認したといっていた。

さて、この読書とテレビから、わたしは目下のところ、チベットはかつて独立国であったと認識している。ただし、これはあくまでも、認識の次元における認識にすぎない。



講演



夏期講座（一九八二年度）

／＼人と作品／＼

八二年八月一、三、四日
於本館会議室

西鶴の文体

久保由美

近世文学のメルクマルに關する不一致に對して、西鶴の『好色一代男』をもって浮世草子の嚆矢とすることについては諸家が一致している。というよりはむしろ、『一代男』の出現によって『浮世草子』という、前代の仮名草子とはまるで違つた小説の概念が誕生し

たと言うほうが適切であろう。

浮世草子と仮名草子との隔りは、『憂世』から『浮世』への転換という中身の問題もさることながら、実はその文体によるところもずいぶん大きい。

『一代男』は当初ごく一部の同好の士を予定した一つの試み、転合書であつて、一般目当ての著述ではなかつた。その身内意識がもたらした難解さにもかかわらず、『一代男』は人々から熱狂的な歓迎をうけた。以後、西鶴は読者の要求や嗜好を的確につかみ、それに応えるべく主題や素材を發掘しだす。

この創作態度の変化は自ら文体に反映されている。浮世草子の流行作家となつて広く読者を予想したとき、西鶴の文章は平明なものになる。『一代男』を最高として、それ以後は雅文脈の積み重ねによる複雑な構造の文が減少し、古典の借用やパロディが姿を消していったのはその表れである。

しかしそのことは彼が文体に對する工夫と配慮を放棄したことを意味するわけではない。それどころか、武家物では会話の文にさえも「た」や「ござる」のような俗語・口語を使用せず、逆に町人物では『一代男』以上の口語の氾濫があるなど、西鶴は素材の変化に文体を巧みに連動させて統一感ある作風を作りあげている。

思考や思想は常に「ことば」によって具象化され伝達される。西鶴が主張しようとしたものも、それが「古いことば」、すなわち使い古された常套句や單調な七五調によって書きつづられていたとしたら、これほどまでに多くの人々を惹きつけることはできなかったであろう。

クルト・ネットー

「日本鉱山編」

吉田光邦

クルト・ネットーは一八四七年八月、ザクセンのフライベルヒに生れた。長じてフライベルヒ大学に入り、採鉱冶金学を修めた。当時同大学は、採鉱冶金の技術の優秀さで、ヨーロッパに聞えていた。

一八七三年、日本からの招聘を受けて工部省に入り、十二月、小坂鉱山に入つてその技術改良に着手し、湿式法を採用してその近代化につとめた。しかし七七年、同鉱山の払い下げとともに東京に戻り、十月、東京大学理学部の採鉱冶金科の教授となった。

七九年、当時東京にあったドイツ人を中心とする東

アジア自然誌学会（当時の日本では東亜風土博物講究社と訳す）で、日本の鉱山について、その知見を述べ、その内容は学会の機関誌に発表された。これを理学部教授の今井巖、安東清人らが訳して、八〇年、東大法文学部から「理科会粹」第二帙として刊行したのが『日本鉱山編』である。

本書はまず日本の伝統的な採鉱と冶金技術の概要が記され、ついでそれを批評しつつその改良策を述べている。また五九の図版をかがげ、日本の伝統的な採鉱冶金用具の図と名称をしめしている。従つて伝統的な技術の内容を知るにはまことにけっこうの書物である。さらに議論は技術のみならず、鉱山経営法にも及び、多くの統計表をもしめして、日本の鉱業の世界における地位をも説くところが多い。

八四年には『涅氏冶金学』（上）が刊行された。これは大学での講義録で、渡辺渡や野呂景義らの筆記と訳を整理したもので、普通冶金学と鉛・銅に関する応用冶金学が説かれる。約八百ページのもので、べつにきれいな銅版画による付図一冊がある。下冊は諸金属の冶金についての論述を収める予定であったが、これは未刊に終つた。

彼にはまた『日本の紙の蝶』と題する日本印象記があるが、おだやかな筆で日本の風物をきわめて情緒的

に記している。

さらにネットーは、在日中に多くのスケッチを試み、そのかなりのものが残存している。淡い彩色をほどこしたもののだが、当時の日本の街頭風景、小坂鉦山の暮しなどがみごとに描かれ、これまたすぐれた明治の記録となつてゐる。これは『日本の夜明け』と題して数年前に刊行されている。

曹雪芹と「紅樓夢」

井 波 陵 一

《紅樓夢》に魅せられた人を「紅迷^{ホンシ}」と呼び、《紅樓夢》を研究することを特に「紅学^{ホンガク}」と称しますが、これは他の文学作品ではお目にかかれない現象です。

《紅樓夢》は同じ長編小説と言っても、《三国志演義》や《水滸伝》のように豪雄無双の英雄達が登場する物語ではありませんし、孫悟空の夢幻自在の活躍を描いた《西遊記》とも違います。賈宝玉という貴族の坊っちゃん、姉妹や侍女といった大勢の少女達と共に過ごす日々を描く——これが《紅樓夢》の大筋です。そして家の没落とともに強められる大人の世界からの

締めつけによって、少年少女達の心は傷つき歪められ、やがて悲劇的結末を迎えることになります。英雄達の物語に比べると確かに「弱々しく」感じられるこの作品について、魯迅は「立場が違ふと、全く違った具合に読める作品だ」と評しています。これは読む人によって、まだ同じ人でも読む時期によって読後感が変わる、つまり読み返しの効く作品であることを指摘しているわけです。実際《紅樓夢》はどういう読み方にも根拠を与えるようで、二百年來様々な見解がしのぎを削ってきました。読者の受け取り方に定型が無く、情況に応じて変化する——それは《紅樓夢》が読者一人一人の問題意識にガッチリと食い込んで来るからではないか、と私は考えます。

作者曹雪芹の伝記はあまりよくわかっていません。少年時代に華やかな貴族生活を送ったらしいこと、家が没落した後《紅樓夢》の執筆を始め、貧窮のうちに四十代で亡くなったことが辛うじて確かめられるに過ぎません。彼がどういう意図の下に《紅樓夢》を書いたか——これは大変難しい問題です。ただ二十年にわたる創作活動の中で、彼は(一)自分が信じ切っていた世界の脆さ、(二)その世界が崩れ落ちた時の衝撃、(三)それを挽回できない無力感、(四)それでも生き続けていくことの意味、を問いつめようとしたことは確かだと思わ

れます。「善人は徹底的に善、悪人は徹底的に悪といった伝統的写法を打破した」(魯迅)この作品は、現実味にあふれた人物を生み出すことによって、この世で生き抜いていくことの重みを直視しつつも、だからと言って情況に流されて自らの内なる問題意識を捨て去ることは拒み続けるという、大変困難な作業の結晶と言えるでしょう。

裴灌「嵩岳少林寺碑」

礪波 護

嵩岳とは、洛陽の東南七〇キロにある中岳嵩山のことで、五岳の一つ。高さは一四四〇メートルある。北魏の道士寇謙之が、四一五年にこの嵩岳の山頂に降臨した太上老君から経誠を授けられた、と伝えられるように、大小三十六峰からなる嵩山は、宗教的な雰囲気の色濃くただよわせていた。この嵩岳の少室山の北麓にあり、いまでは少林寺筆法の発祥の地として有名な少林寺は、北魏王朝の洛陽遷都直後の四九六年に、孝文帝が仏陀禪師のために創建したもの。禪宗の初祖菩提達磨が面壁し、その弟子の慧可が断臂した伝説で名

高い。

隋唐交替期の群雄割拠の際、この地方が王世充の支配下に入っていたのに、少林寺の有力僧十三人らが李世民側に諠みを通じたことも一つの契機となって、李氏の唐王朝が全国統一をなしとげたので、その論功行賞のため、寺領莊園と碾磑を安堵する教書や勅がだされた。それらの教書や勅を刻されたのが、高さ三メートルに及ぶ「皇唐嵩岳少林寺碑」あるいは「唐太宗御書碑」と称される石碑なのである。

古代から金元にいたるまでの金石文を著録した王昶撰の『金石萃編』によれば、この碑の碑額は玄宗の御筆で、碑の正面の上段には秦李世民の署名入りの教書が刻され、その下に、吏部尚書裴灌の撰文ならびに書の「皇唐嵩岳少林寺□」の長文が刻され、最後に、「開元十六年七月十五日建」とある。そして碑陰には、開元十一年十一月の内品官の牒を刻した「少林寺柏谷塢庄碑」と同十一年十二月の牒をつらねた「少林寺賜田勅」が刻されたことになっている。従来は、正面の裴灌の文が禅宗史の研究者によって重視される一方で、法制史や寺院経済史の研究者によって碑陰の諸文が取上げられてきた。しかし、おおむね『金石萃編』などの金石書に依拠して、もとの拓本を検討されなかったようである。

私は、人文科学研究所に所蔵する三種の拓本にもとづいて、正面と碑陰とを総合的に考察し、この碑は、いわゆる宇文融の括戸政策の一環として発布された、開元十年正月二十三日の仏敎道教寺院の莊園を制限する勅から、二年がかりの請願運動、裏面工作の結果、少林寺のみを特別に免除してもらった次第を石に刻して記念するために裴灌に書いてもらったものである、との結論に達し、「開元十六年七月建」は別筆との判断を示した。ちなみに、宇文融の括戸政策の際、判官の一人に任じられた裴寛は裴灌のいとこで、ともに河東聞喜県の名族の一員であったが、この裴寛は熱心な仏敎信者であり、のちに東都洛陽の知事たる河南尹になった。

なお、当日は碑面と碑陰の写真を並べて解説したが、その際に柳田聖山教授が表装された碑面の拓本を初公開として展示していただき、聴講の方々に臨場感を味わっていただけたことに、紙上を借りて厚くお礼を申し上げます。



反キリストと中世の論理学

岩 熊 幸 男

私の講演は、正直なところ、間違った見込みから準備を始め、そして失敗に終わったと言わねばならない。まず言い訳を許していただきたい。

中世の論理学書には、反キリストという言葉を用いる例がよく現れる。特に、私の今調べている十二世紀のある論理学書には、他の時代には見られぬ多様な仕方でそれが用いられている。しかもそれらには、全く理解に苦しむものが多いのである。写本の読解を終えた段階で、私は、それらが不可解なのは十二世紀に特有なある反キリスト像を背景にしているためらしいという印象を持っていた。そこで、講演を命ぜられた時、自分にとってのこの宿題を取り上げてみる気になった。

そこで、始めて中世の反キリスト像について組織的に調べていくと、やがて自分の予想の間違っていたらしいことが解ってきた。十二世紀に特有な反キリスト像など特に無かった。かの論理学の例が難解なのは、

単に、当時の論理学の実態についてまだ研究が進んでいないせいに過ぎなかった。

しかしこのことが明らかにになった時は、時すでに遅かった。新しいテーマの準備をするには時間が足りない。題目も発表されてしまっている。そこで、その時点でわかっていた事柄をつなぎあわせて、とりあえず体裁だけととのえてはみたが、要旨というほどのものも特になし講演となった。

まず、始めに、中世の人々が未来に必ず存在すると信じていた反キリストという人間の「伝記」を紹介した。（主に十世紀の僧アドソの著作に依る。これは當時までの考を集大成し、かつそれ以降のあらゆる反キリスト像の基準となったものである。）あわせて、その反キリストのイメージにまつわる限りで中世史を素描した。（中世で反キリストという言葉は、社会不安のたび毎に一種のイデオロギー用語として常に立ち現れていたのである。）

最後にいよいよ、反キリストが中世論理学書に用いられる仕方を、三つの単純なケースを通して紹介した。それらはいずれも、反キリストを、未来に存在するはずの非必然的存在の一例としてのみ用いられている。（かの難解なケースにおいてもこの点は同じであると現在では考えている。）

反キリストも、中世論理学も、人に知られる所少いものである。その人に知られる所少いものをともあれ簡単に紹介しえた。こう考えて自ら慰めている次第である。

モンテスキュー

「法の精神」

樋口 謹一

モンテスキューの名を耳にすると、「三権分立」の創唱者と条件反射的に応ずるのが常識だが、果たして正しいだろうか。

彼の生年は一六八九年、イギリス名誉革命の次の年、一七五五年の没後三九年にしてバスチーユ攻略でフランス大革命が本格化する。名誉革命を正当化したロッキは「三権分立」の祖型をあたえ、フランス大革命最初の一七九一年の憲法は「三権分立」を体制の一原理として宣明した。

近代史上のこの二大事件をへだてる一〇〇年をほぼ二分する一七四八年に、モンテスキューの名著『法の精神』は世に出た。この事実こそ、彼が右の二事件を

媒介する思想家として、「三権分立」を近代的政治の根本原理として提唱した、との誤解を生むこととなった。この近代最初の社会理論家としての不幸であった、と言うほかはない。

たしかに、イギリスの国家構造をあつかった第一篇第六章は『法の精神』中最長であり（わずか二、三行の章もあることを思え）、熱もこもっている。「三権分立」をふまえた自由の国イギリスに対するモンテスキューの讃美にいつわりはない。かの誤解は生ずべくして生じたのだ。

だが、このことは、それが彼の祖国フランスにとっても処方箋であつたことを意味しない。ブルボン絶対王政のデスポチスムに対してフランス人の自由をまもる防壁には「中間団体こそが当たるべきだ」（そしてモンテスキュー自身ボルドーで裁判長の職にあつた高等法院もその重要な一つであるべきであつた）というのが、彼の処方箋だったのである。

この相違は、その社会理論が「相対主義」を原理とするものであつたことによるものであつた。彼は、法を自然的条件、経済的条件、政治的条件、思想的条件などとの必然的關係において考察しようとした。ホッブスやロックが、またルソーがそれぞれに唯一の普遍妥当的な理想を絶対的なものとして提示するという意

味での絶対主義にたつたことを思えば、モンテスキューの社会理論の科学性は、なお不透明な点を残しているとはいへ、注目すべきものであらう。

さらに忘れてはならないのは、彼の相対主義が負（マイナス）の絶対主義に裏うちされていたことである。すなわち、彼のアンチ・デスポチスムは絶対的であり（そこから右の不透明性も生じた）、その点から現代にも示唆するところが大であると言ふべきであらう。

開所記念講演（一九八二年度）

八二年一〇月二十九日

於 本館会議室

志士と官僚

佐々木

克

幕末の志士といえば、誰でもすぐ数人の志士の名と人物像が浮んでくるであらう。しかし、明治の志士と

は、ほとんど耳なれない言葉でしかない。あの幕末の志士の群像はどこへ行ってしまったのか。

志士とは、高い志を持つ人、国家・社会のために身を犠牲にしてつくそうとする志のある人、という説明がある（『広辞苑』）。吉田松陰をみるまでもなく、志士は（国家）へのめり込んで行く政治的存在であった。

ところで、その志士たちの志とは、新国家建設の志であったといえよう。そして幕府を倒し、明治国家を出現させた。すなわち、志士たちの志は達成されたのであった。しかし同時に、その時、志士を必要とする時代は終わったのであった。では志士はどうなるのか。新しい志士が必要とされるならば、こんどはその志士は、再び新国家を建設する——明治国家を否定して——志士とならねばならない課題を背負うべき存在であるはずであった。

要するに、新政権が誕生したその時、もうそれまでの志士は無用となったのだ。新しい政権で必要なのは体制の擁護者となる官僚・政治家たちであり、以前の幕末の志士であった彼らは、志士から官僚・政治家へ脱皮し、自らの内面も、そしてかつての同志であった志士たちをも否定して行ったのであった。

くり返せば、その過程で、かつての志士たちは、一つは官僚・政治家となり、いま一つは、志士から転身

出来ずに志士にとどまり、さらに二つのタイプに分解して結局消滅する（明治の志士）。その一つは反逆の系譜につらなる分子であり、もう一つは、明治政府に一度は登用されるが挫折してゆく系譜の志士たちである。

官僚の特徴は、組織を作り維持して行こうとし、将来を見通す構想力とバランス感覚を持つ。そして天皇を独占する論理を構築して行った。明治の志士は、組織を軽視し個と個のつながりを重視し、構想力より直感力をたよる傾向をもつ。そして常に君側の奸をはらうという発想を持ち続ける。つまり彼らの発想は、自らもかわって達成した成果（（明治国家））を決して否定しようとするものではなかった。彼らの個々の発想と人間像は多様で独自のものがあったが、そうした明治の志士たちの発想と行動を封じ入れたのが、官僚達の統制と画一化の論理であったのである。

鏡の国の孫悟空

荒井 健

鏡の国の孫悟空といえますと、奇を衒った題だと思われるかもしれませんが。しかし悟空は実際に鏡の国へ

行っておりまして、そのことは『西遊補』と称する、『西遊記』の一種のパロディの中に出てきます。『西遊補』は十七世紀前半、明王朝滅亡の寸前に、董若雨（一六二〇—一八五）という年若き文人によって書かれました。この小説は『西遊記』の十分の一にもみたぬ短さで、またそれほど有名でもありませんが、全くちがったタイプの一傑作とみるべきでしょう。

すでにお読みの方には全くの蛇足になりますが、順序としてまずあらすじからお話させていただきます。

『西遊補』とは文字通り西遊記の補遺を意味し、原西遊記の五九回から六一回、火焰山にさしかかった一行が羅刹女の芭蕉扇を借り山の火を消してからやっと通り抜ける、直接的にはこの個所を受けており、で、「三たび芭蕉扇を調うの後に入る」と、副題がついていきます。さて、三蔵法師一行が火焰山を越えて進んで行き、牡丹の花の咲き乱れる春の野に出る、そこに遊び戯れる女や子供たち（妖怪でもない悪漢でもない）五十人あまりを、ちよつとしたことで悟空が皆殺しにしてしまふ。悟空による無意味な大量殺人など、原西遊記では絶対には有りえない出来事ですけども、主人公たるかれの性格が変えられているわけでは別にありません。そのあとも無暗と多い殺しの場面すべて、『風流夢譚』の中で切り落された首が金屬的な音を立てて転がった

のと同質の、乾いた笑いを思わせるものがあります。徹底して深刻さを排除した、原西遊記とは異質の遊戯性がまず冒頭からあらわれ、最後まで一貫するのです。悟空はさらに「新唐」王朝の宮廷へ、青々世界の城廓へ、万鏡樓へ、そして秦の始皇帝に会おうとして万鏡樓から鏡の中に入り、古人世界へ、未来世界へ、荒唐無稽な遍歴を続けるが、実は魚の化物（鯖魚の精）の創造した宇宙の中をさまよっていたのでした。

以上のような、あらすじの紹介だけで完全に時間を使ってしまい、肝心の作品の解釈については殆ど何もうひまがありませんでした。この小説とほぼ同時代に描かれたとおぼしき奇妙な絵画があり、両者にどうやら共通の構造（いれこ）を見出すことができる、ということを経うじて付け加え得たにすぎません。今度はまた、あらすじばかりの話のあらすじさえきちんと要約できませんでした。重ねがさね申し訳ない次第です。

質金のはなし

——ジョン・ローとモンテスキュー——

浅田 彰

差し出されたおかねが本物か贋物か、どうやって見

分ければいいだろうか。金屬貨幣、たとえば金貨を使っていた時代なら、話は簡単、しかるべき量の金を含んでいるのが本物で、ほとんど含んでいないのが贋物、というわけだ。兌換紙幣の場合には、中央銀行で金とかえてくれるのが本物で、かえてくれないのが贋物、ということになる。ところが、現在つかわれている不換紙幣は、一片の金も含んでいないのはもちろん、中央銀行で金とかえてくれるわけでもない。昔の人なら、こんなもの贋金じゃないか、と言うだろう。それを一体どうやって説得すればいいだろうか。

不換紙幣でも、「一般的受容性」をそなえているかぎり、真正の貨幣として十分に機能しうる。これが経済学者の答である。一般的受容性というのは、しかし、決して単純なものではない。実際、任意のA氏が紙幣を受けとっておけるのは、彼がそれを使おうとするとき任意のB氏が受けとってくれるからにはかならず、してみると、一般的受容性は一般的受容性そのものによってはじめて根拠付けられるのである。このようなループを安定化させるための常套手段として、上位の権力が介入し、紙幣に法的な強制通用力をもたせているのだが、そのことは措こう。

いっそう興味深いのは、このループに時間のずれが含まれていることである。今日A氏が紙幣を受けとっ

てくれるのは、明日使えるからにはかならない。逆に、世界の終わりの日が指定されているとすると、その日には誰も紙幣を受けとらうとせず、紙幣の価値はゼロとなる。その前日も、翌日価値ゼロとなるものを受けとるとはいえないから、紙幣の価値はゼロとなる。以下おなじ論理がくり返されて、経済はうまく動かないしてみると、最終期限がオープンになっていて、解決がそのつど先へ先へと繰りのべられていくことこそ、不換紙幣のメカニズムの核心であることがわかる。ババ抜きジョーカーのように次から次へ手わたされていくかぎり、本来は贋金であった筈のものが真正の貨幣として機能しうるのである。

講演では、事実上不換紙幣を導入することこうした無限回路をスタートさせた最初のひとりとして、一八世紀初頭のフランスの経済界に君臨した財政家ジョン・ローをとりあげ、それとの対比において、有限な調和のヴィジョンを固持したモンテスキューの経済思想に照明をあてようとした。

本のうわさ

竹内 実『中国喫茶詩話』

(A5版二六二頁 淡交社)

多少とも茶に関心をもつものにとつて、中国の茶といえ、遠いふるさとの味と文化を訪ねるような、一種の興奮と好奇心を覚える。それに応えてくれるかのように、本書は喫茶のはじまりから現代中国人の飲んでいる茶にいたるまで、古くは詩に現われたさまざまな茶や、小説に描かれた喫茶の情景によって、また現代のそれは台湾文山紀行と冬の西湖紀行をつうじて、茶の歴史と魅力を遺憾なく描いている。いまさこんなことをいって失礼かとも思うが、竹内さんは訳詩も文章もほんとうに上手である。その美しい文体によって、この本にはそこはかとなく詩的ふんい気がただよっている。なんとも楽しい、また教えられることの多い本である。



ところで私は本書をよみながら、たえずイギリス人の喫茶のことを考えていた。いうまでもなくイギリス人は一七世紀中頃中国茶を知って以来、もはや茶がなくては暮らせないほど、茶にいかれてしまった国民である。いまでも茶の一人当り消費量は、茶の祖国中国を抜き、アイルランドについて世界第二位である。それほどまで茶の魅力にとりつかれたイギリス人、そのなかでもとくに詩人や文人たちが茶をどのよう讃美していたか、それを盧全や白楽天、蘇東坡などがうたった茶と比べてみると面白いのではないか、ということが頭にあったわけである。

イギリスでは最初に宮廷へチャをもち込んだのが、一六六二年チャールズ二世のも

とヘポルトガルから嫁いできた王妃キャサリンである。彼女は俗に「茶の女王」とよばれているが、当時の宮廷詩人エドモンド・ウォーラーが女王に茶を称えた詩を献上した。すなわち「ヴィーナスが身にまとうテンニンカ アポロが冠る月桂樹 そのいずれよりも茶は素晴らしい 女王は茶をめて下賜したまう」といった調子である。これを例えば蘇東坡の「蟹眼 すでに過ぎ 魚眼 生ず 颯颯として 松風の鳴を 作さん」とすや、同じく「江に汲んで茶を煎る」の一節「活水 還 すべからく 活火もて煮るべし 白ろ 釣石に臨んで 深く清めるを取る……枯腸 いまだ 三椀を禁じ易からず 坐して聴く 荒城長 短更」と比較するとき、茶の東西文化のちがいは余りにも明白な感がある。イギリスにはその他エミリー・ブロンテやジョージ・ギッシングなど多くの文人が *the tea table* のものたらすしみとした温かさについて書いているが、私たちには『西遊記』『紅樓夢』『儒林外史』などに描かれた中国茶の方がはるかに親しみがわく。それにしてもイギリス人が選択したのは、中国茶のなかでも紅茶であった。その紅茶が本書のなかには

殆どでてこない。『紅樓夢』にでてくる「六安茶」（二七八―八八頁）がそれなのだろう。

うか。

（角山 栄）

山田慶児『科学と技術の近代』

（B6版二八二頁 朝日選書 朝日新聞社）

本書は長短の論文・講演録を集めたものである。「混沌の海へ」の姉妹編と言えようか。前著が中国を対象としたのに対し、本書は西洋近代以降の科学技術に関する論究からなっている。両書並べて読んで、洋の東西に渡る著者の科学技術史に関する大きな知識に圧倒された。評者たるべき筆者は、中国は言うに及ばず、西洋科学史についても全くの無知に等しいのである。

著者の一貫した関心は、しかし、人間が自然に関する時の次の三つの側面の相互関係にあると読みとれた。即ち、自然認識としての科学、自然に働きかけものを作り出す技術、そしてその両者の方向を導く価値体系である。この三側面の関係の通時的・共時的な分析から、「科学と技術からいわずに手放しの未来が失われた（あき）」現代の姿

は、次の様に現れてくる。「科学は技術の理論的基礎を提供し、科学の方法が生産過程に導入される。それはひろがえて、科学研究の方向を技術が決定する結果をもたらす。のみならず、科学研究の発展が新しい技術の開発の、新しい技術の開発が資本主義経済の発展の基盤であるのがあきらかになるにつれて、科学研究にいつそう直接的な目的が設定される。：国家がその目標を設定し、研究を規制する（あき）。」かくして科学と技術は癒着し、没価値的な普遍妥当性・客観的必然性の幻想のもとに、国家意志に奉仕している。まさにこのような状況から、環境汚染・核問題等の矛盾が現在大きく露呈しているのである。

以上の分析は、著者特有の巧みな比喩と、ここに至る過程の史的な考察に支えられて、

まことに説得的に展開されている。

著者は本書を「万事終った後からやとと：出てくる…エピメテウスの智慧（あき）」と呼んでいる。しかしそうではない。本書は、如上の現状を克服する方途をも指し示しているからである。それは一言でいえば「価値体系を：人間の手に奪回（あき）」することである。各論が様々な角度からそれに論及している。

しかしこの点で評者はやや食い足りない思いがした。一体奪回されるべき人間の価値とはア・プリオリにあるものだろうか。価値意識の歴史的被規定性と、新しい価値選択の可能性との関係、マルクス主義が当初から含むこの問題を捨象する時、人間の価値という言葉は、ある情緒的意味は持ちながらも、終に具体性を欠く。著者のよく挙げる土法の思想は、確かに我々にも示唆に富むが、やはり或る特定の史的状況にのみ、生れ働いたものであろう。

筆者はこの点で、著者が「人間に：盲の希望をうえ（あき）」むプロメテウスでないことを望むものである。

（岩熊幸男）

柳田聖山『ダルマ』

(人類の知的遺産 16 B 6版三六五頁 講談社)

書名の「ダルマ」のカナ文字にまず興味を惹かれた。読者一般には、禪宗の初祖の名としては、常識的に「達磨」の漢字の方が親しいだろう。あえてカナ表記になっているのは、歴史的人物として、彼が中国土着の人でないという伝承にもとずくことが勿論ある。しかし、柳田さんが「達磨(達摩)」としなかったのは、それだけの理由ではない。

禪の開山としての、仏教既成宗派内での祖師像から離して、彼を自由に歩き廻らせたかったのである。つまり、既成概念の厚化粧をおとした素顔を差出そうとするわけだ。ところが、本書を読んでゆくと、著者は素顔どころか、この禪者の肉体そのものまで消し去るのが本意であるかの如くにみえてくる。事実、ここに論じられるダルマはまことに出没自在で、歴史の時間と空間に束縛されず、思いがけないところにひょ

いと顔を出す。

著者のことばによれば、「無慮無数の有相のダルマと、それらを生みだす原点となる、無相のダルマその人の正体を考えようとする」ことが本書の主題である。そのためには、既成の概念のとっつき易い「達磨」の語のイメージは邪魔になる。色のつかないカタカナの「ダルマ」として、そこに、禪宗とおよそ禪を取巻く民俗をつらぬくダルマの原像からすべてを見直したいという柳田さんの意図がある。

I二つのダルマ、IIダルマの伝記、IIIダルマの思想、IVダルマと現代、の四章のうち、全巻のおよそ半分の量を占める、III章の敦煌本「二入四行論長卷子」の訳と解説が中心となる。ここにみえる最初期の禪宗者たちの思想が、ダルマの思想と名付けられている。

これは、およそ体系化などには関心のな

い、あっけらかんとした思想であるというのが第一印象である。ひたすら心を無にして真実在に立帰れという主題が、あらゆるヴァリエーションを用いて奏される。伝統的な仏教が重視する、悟りに至る修業の階程なども一蹴される。あらゆる言語表現の対象には安立すべき実体など存在しない、つまり空であるということの強調は、インドのナーガールジュナ(龍樹)のそれに似るが、他方、龍樹のような論理の徹底はない。むしろ、どちらかといえば般若経、維摩経に登場するひとびとに近いのではない。この語録に登場する禪者たちは、いずれも強烈な気合を発するかのようである。そこがまず印象に強い。いわゆる中国的な仏教がここから確立してゆくという。その辺りの解説が極めて興味深かった。では、これらの、伝記の殆んど知られない禪師たちの歴史的背景をもっと知りたいという気がしてくる。ダルマとその弟子たちは、はじめ定住せず、遊行を主としていたというこの時代に、制度化された寺院仏教の外にあった遊行者集団の実態はどういうものであったのだろうか。

本書の焦点となる「無相のダルマ」の問

題とは外れるが、歴史的人物としてのダルマ、即ち、菩提達摩の名前についていささか気になったことがある。伝記によれば、菩提達摩は外国僧であり、ペルシャあるいは南インドの人という。禪宗では一般に後者として伝わるようだ。この字は「ボーディ・ダルマ」の音写という。インド系の名の多くは、この様に二語よりなる複合語（A+B）の形式をとる。「ボーディ」は悟りを意味し、インド諸宗教の中では仏教、ジャイナ教の用語、特に前者で愛用される。一方、ダルマの語は人名としては仏教僧あるいは王族の名に用例が多い。但し、名前をあらわす複合語（A・B）の中ではA部分、つまり前半部に用いられることが殆んどで、特に仏教僧の名としてはこれが通例である。有名な例では、ダルマ・パーラ（護法）、ダルマ・キールティ（法称）、ダルマ・トラータ（法救）などがそれである。しかし、名前の後分（B）に「ダルマ」を持つ仏教僧は、私は真聞にしてこのボーディ・ダルマ以外に知らない。確かにB部分に「ダルマ」を持つ王族の名が僅かながら無いわけではない。また伝承では菩提達摩は南インドの王子ともいわれている。しか

しながら、ボーディ・ダルマなる名前は、仏教僧の出家名としていかにもぴったりにあって、俗名の感じがどうもしないのである。何やらくどくどと書いたが、要するに禪の初祖のこの名前は私にはどうもしっくりこないのである。名前の前分と後分を置換えて「ダルマ・ボーディ（達摩菩提）」ならば納得できる。（実際に、本書の九三

頁に、永寧寺に來た胡僧の一人として達摩菩提という人の名がみえる。これはどういふ人なのだろうか。）
どうやら、ダルマは、思想のみならず、その名前まで通念を逆転させる新しさをもっているようにみえる。

（井狩彌介）

『吉田光邦評論集』Ⅰ芸術の解析・Ⅱ文化の手法・

Ⅲ文明の基軸

（一九九〇×一三編 各三六三頁 三七一頁 三八三頁 思文閣出版）

本書は、ここ十数年のあいだに、吉田先生がさまざまなところで發表された文章を、美術・工芸に関するものを中心として、全三巻にまとめたものである。いずれも肩のこらない短いものになっている。

順序を気にせず、興味のむくままにひろいよみしていくと、いつのまにか全三冊のほとんど全部をよんでしまっている。そういうふうな、この書物はできあがっている。三冊それぞれに標題がつけられ、さらに各

冊とも数篇ごとの章にわけられているけれども、これはあまり気にせずによむのがよいようである。

ただし、章ごとのはじめにつけられているカットと、各冊の箱とびらにみえるワッペンのデザインとは、それがいったいなんであるかを知らない無学な私にも、見ていたのしくなってくるものである。第三巻のあとがきによると、著者自身のえらばれたものらしい。機会があれば、あればど

ういうものなのですかと、こっさりうかがいたいと思っている。

著者はこれらを、書物を世に送るときのひとつの愉しみといわれる。じつにうらやましい。この書物自身、その内容に著者のそういう「遊び」の精神が、随所にみられるようである。

所内のある共同研究班での吉田先生は、たいてい五分ばかりおくれて入室され、書物を開いたあとも、まずはゆっくりパイプをひとふかしされる。他の班員がしかめつらで書物にあい対しているあいだも、先生ひとりには、にこやかに余暇をたのしんでいるふうさえある。それでいてその発言は、つねに急所をついて、「専門家」をあわてさせる。

この書物をよんでいて、私は、この研究班での先生のすがたが目にかんでくるのを禁じえなかった。パイプたばこのにおいがしてきたりはしなかったけれども、どうもそういう雰囲気のおふれてくる書物である。電車のなかでよむのにつごうのよい、手ごろな大きさにできている。何日かの通勤時間をたのしくすごせたことを感謝したい。

最後に私の最も感銘をうけた一篇をあげさせていただくなら、第三巻の「挫折のピアニスト久野久子のこと」である。この一篇が、最終巻の最後の章として（つまり

共同研究報告

『五四運動の研究』第一函

（A5版三冊 一三六頁 一〇八頁 一四五頁 同朋社）

この第一函には、（一）狭間直樹著『五四運動研究序説』、（二）片岡一忠著『天津五四運動小史』、（三）藤本博生著『日本帝國主義と五四運動』というそれぞれ独立の冊子がおさめられており、全五函という大計画の最初の函であるという。

まず『序説』と題された狭間論文をみると、五四運動の背景として、袁世凱以後の軍閥政治の問題点の整理から始められているが、この時期についての研究は少いので、こうした形でのまとめは、我々日本史研究者にとってもありがたいものである。ついで「北京の学生運動」、「上海の『三罷闘争』」がとりあげられているが、著者がとくに力を入れているのは、上海の運動が罷闘

はそのためにクラシックカーのカットをひとつ余計につけて）おかれていること、妙に心をうつものがある。

（浅原達郎）

（学生のレストラン）↓罷工（労働者のレストラン）の順序で発展してゆく過程、とくに後二者の過程であろう。著者はここで、学生、商界、労働者層それぞれの内部の問題と、相互の錯綜した関係を具体的に指摘しており、興味深く読ませてくれる。

しかし、上海の都市機能が麻痺することをおそれた租界当局や列強の圧力、それによる軍閥内部の矛盾の激化などをとらえて、ただちに、運動が罷工の段階に達することによって、運動が反日の枠をつき抜けて「帝國主義、軍閥の支配秩序にたいする全面的な対決にまでつきすすんだ」（九一ページ）と評価されているようにみえるのは、

いささか気になるところである。運動への特定階層の参加と、運動の質的変化ということの間には、なお多くの検討すべき問題があるのではあるまいか。

片岡論文は、罷市、排貨を中心とした学生と商人層とのからみあった運動を画き出しているが、それによれば、天津での運動の本格化は、上海での罷市実現を契機としているようである。とすれば、五四運動の基軸の一つを罷市の全国的波及に求めてもよさそうであり、罷市実現の条件の各都市間での比較などもうかがいたくなってくる。

福永光司編『中国中世の宗教と文化』

(B5版六五一頁 京都大学人文科学研究所)

ある人が、いつかうまいことを言っていた。「本というものは立たなければだめだ。書棚において倒れてしまうようでは本じゃあない。」かくして、積み上げられた原稿の枚数を数えながら、書物の版型が決められる。しかし、この『中国中世の宗教と文化』は、人文刊行物では最大のB5を用い

もちろん、罷市の基本的な条件は「日本の無道な侵略にたいする不快感が社会的に定着」(狭間論文、五四ページ)していたことであろう。そしてその点を具体的に見ようとするれば、藤本論文が意図しているように、日本政府の政策とともに、中国現地で日本人全体の行動を明らかにすることが一つの前提になるにちがいない。五四運動が排除の目的とした日本の山東占領、七十余年にわたるその軍政の実態を明らかにすることは、日本史研究者の課題でもある。

(古屋哲夫)

ながら、みごとに、立つ。立派なものだ。総計二千枚にもおよぶ、重厚な論文集の視覚的成果に、まず讃辞を呈したい。

本論文集は、六朝隋唐期の道教・仏教の思想的展開、仏教受容の思想史的意味づけ、仏教と国家の関わりなどについての、十篇の論文からなっている。いずれも、眼くば

り、手続き、論証の手堅さといった点で、評者のごとき門外漢をも十分に魅了する密度の高い論考となっている。個々の論文について語る資格は評者にはまったくないが、全体について一言することをお許しいただきたい。

この論文集は、共同研究「隋唐の思想と社会」を母体にするという。これが論文集としてまとめられたとき、「隋唐」が六朝をふくむ「中国中世」へ、「思想」が「宗教」へと改められた理由は、福永先生の序文に述べるところは説得的である。しかし、なぜ「社会」が「文化」となったのかは、いささかふれられていない。というのも、われわれが『……の宗教と文化(または社会)』という表題の書物に接して期待するものと、本書を通読してうけるものとが、文化といおうと社会といおうと、いささかズレているからである。これは何も、正統と異端、民間信仰、宗教文化と世俗文化といった、ヨーロッパ中世史学におきまりの視角が欠如しているといっているのではない。論者がいずれも、教義または個人の思想的内面への考察を深めるという、すぐれて思想的的手法をとっているため、宗教ま

たは宗教に関わる知識人が、文化あるいは社会とどのように相互規定しあっているかが、いまひとつ浮きぼりにされていないからである。もっとも、研究会または論文集のタイトルを安定させるためだけに「社会」「文化」という語を付置しただけならば、評者はまったくつまらぬことを述べたことになるが。

書評というものは、すでに読んでしまっただけか当然読むはずの人を対象に論評するにせよ、潜在的読者層にむけて勧奨するものにせよ、評者には著者と同程度の蓄積が要求されるものと思っていた。しかし、この論文集の書評を命じられて、書評にはもうひとつの型もあるものだ、うかつにも初めて気付いた。つまり、当然読むはずのない者に書評させることで、評者にその書物を読破させようとする、教育的配慮もあった書評である。ありがたうお受けして、まる二日かけて読了した。すでに読んでしまったか、当然読むはずの人を対象に、まったくの門外漢が書評するはめになったが、たいへん勉強になりましたと、著者御一同と『人文』編集部の方先生方に感謝したい。

(田中峰雄)

叙 勲

○藤枝 晃名誉教授は勲三等に叙され旭日中綬章を授けられた(八二年一月三日)。

訃 報

○元助手吉田静一氏(東京経済大学教授)は八二年四月一日逝去された。

人のうき

○谷 泰教授(西洋部)は、一九八二年度海外調査隊(第三次)の一環として、六月二日伊丹発、ブカレスト、アテネ、イスタンブール周辺でユーラシア西南部有畜社会の比較文化的研究をし、パリの人類博物館で資料集収を終え、一〇月二六日帰国。

○井狩彌介助教授(西洋部)は、七月二七日伊丹発、コロンボ、スマトラ、デリー周辺で、南アジア、東南アジアの島嶼部における宗教と文化の比較研究を終え、十一月二日帰国。

○濱田正美助手(東方面)は、一九八二年度海外調査隊の一環として、八月九日伊丹発、アンカラ、イスタンブール周辺で、ユーラシア西南部有畜社会の比較文化的研究をし、パリの人類学博物館で資料集収を終え、八三年二月九日帰国。

○竹内 実教授(東方面)は、八月一〇日舞鶴発、天津、上海、無錫、蘇州市等で日本の青少年の中国認識・中国理解の調査及び中国の青少年の社会意識の調査と現代中国についての資料集収を終え、同月二四日神戸港着、帰国。

○吉田光邦教授(日本部)は、八月二三日伊丹発、上海、南京、重慶、成都市内等で、中国漆器工業調査及び資料集収を終え、九月一日帰国。

○勝村哲也助教授(東方面)は、八月二八日伊丹発、オーストラリア国立大学で中文書目自動化の国際協力に関する会議に出席し、シンガポール総合大学で資料集収を終え、九月五日帰国。

○森 時彦助手(東方面)は、八月三〇日伊丹発、中国科学院、西北大学、大連外語学院等で、五・四運動の研究及び資料集収を終え、九月八日帰国。

○松井 健助手（西洋部）は、九月六日成

田発、ロンドン大学アジア・アフリカ研

究所、パリ大学、イスタンブール大学、

カラチ大学、マニラ大学等で、社会人類

学に関する調査及び資料収集を終え、一

月二〇日帰国。

○宮崎法子助手（東方部）は、一〇月二日

成田発、北京故宫博物院、上海博物館で

中国絵画の調査及び資料収集を終え、同

月一六日帰国。

○狭間直樹・妻谷邦夫・吉川忠夫助教

（東方部）は、日本道教遺跡訪中団（団

長福永光司名誉所員）の一員として、一

〇月二四日伊丹発、中国社会科学院世界

宗教研究所、武漢、廬山、上海市内等で、

道教関係遺跡に関する研究及び調査をし、

十一月一日帰国。

○竹内 実教授（東方部）は、一〇月二五

日伊丹発、人民大学、厦門大学、福州大

学、上海外国語学院等で中国の大学視察

を終え、十一月七日帰国。

○桑山正進助教（東方部）は、十一月二

日成田発、カール市内で第五回国際ク

シャーン研究会議に出席し、マトゥラー

博物館でクシャーン朝およびグプタ朝美

術資料収集を終え、同月二四日帰国。

外国人研究員

○Peter E. Kornicki タスマニア大学講

師 一九世紀日本における出版と社会変

動の相関の研究 八二年七月一〇日～八

三年三月三十一日

招へい外国人学者

○Martin Colecutt プリンストン大学東

洋学部準教授 一六世紀の妙心寺におけ

る禅僧による運営と経済生活の研究（受

入教官 柳田教授）八二年九月二〇日～

八三年八月三十一日

○Benjamin Elman コルビー大学助教

明清思想史の研究（受入教官 小野講

師）八二年一〇月一五日～八三年八月三

一日

○方紀生 北京河北師範学院講師 「現代

中国の社会と文化」班に参加及び中国近

代文学研究（受入教官 竹内教授）八二

年六月一日～八三年三月三十一日

○杜石然 中国科学院自然科学史研究所副

研究員 「古代中国の科学」班に参加

八二年十一月一日～八三年一月三十一日

外国人共同研究者

○Ivina Kraut ボン大学大学院 中国宗教

思想史に関する研究（受入教官 川勝教

授）八二年四月一日～八三年三月三十一日

外国人研修員

○Bernard Faure パリ第三大学院生

「楞伽師資記」とその背景（指導教官

柳田教授）八二年六月～八三年六月

○大丸和雄 パピア大学契約教官 現代日

本の労働集団における閉結性、社会規範、

コンセンサス、生産性について（指導教

官 谷教授）八二年九月～同年一〇月

○呉豊邦 孫文先生の革命運動と日本（指

導教官 竹内教授）八二年九月～八三年

九月

○John Lee トロント大学院生 北齊・北

周・隋・初唐の政治と社会（指導教官

砺波助教）八二年一〇月～八三年七月

○Robert W. Kramer シカゴ大学大学院

利休にまつわる伝説・家元制度 江戸茶

道史料を通して（指導教官 吉田教授）

八二年一〇月～八三年九月

○Christine E. Moller パリ第七大学院生

中国宗教の思想史（指導教官 妻谷助

教授）八二年一〇月～八三年九月

対雪 二首

——李義山七律注釈班——

先日会談を終えた「対雪二首」の連作は「時に東に之かんと欲す」という原注があり、第一首は、

寒気先侵玉女扉 寒気先ず侵す玉女の扉
清光旋透省郎闌 清光旋いで透る省郎の闌
梅花大庾嶺頭発 梅花 大庾嶺頭に発く(がごとく)
柳絮章台街裏飛 柳絮 章台街裏に飛ぶ(がごとく)
欲舞定随曹植馬 舞わんと欲す定めて曹植の馬に随

わん

有情応濕謝莊衣 情有り応に謝莊の衣を濕すべし
竜山万里無多遠 竜山万里なるも多遠なしとすれば
留待行人二月帰 行人の二月に帰るに留待せん

と、別れを惜しむように降りしきる雪の中を出立つ旅人(行人)のころを歌うこと一目瞭然。李義山の詩としてはごく軽い、いや義山でなくとも、むしろきわめて分りやすい部類に属すると思われる、ただ最後の二行にいささか問題があります。第二首の方も語彙といい構成といい情景といい、ここにあげた作とほんとに似たり寄ったりで、なぜまたこんなものを二つ一緒にという疑問が湧くほどです。ひょっとしたら送別の

宴席に待った美形ふたりに一つずつ書いてやったか……。唐詩ないし唐の詩人につきものの妓女を連想したって別に不自然じゃないでしょう。不自然どころか、この二つの詩、実はあげなかった二首目の方がより一層はつきりした表現で——雪をあざむく、というやつですが——色白の女性が暗喩されています。けれどもその比喩がまたあまりに平凡常套のものばかり並びすぎる。そこから逆に、詩人はああ降ったる雪かなとただただ咏嘆してるだけなのだ、そういう解釈だって十分可能ですし、またその方が正しいのかもしれない。となれば、この一首目だって特に五、六行のあたり、どこまでも馬のあとをしたい、衣の袖にすがる女など(字面ではたしかにそう読めても)考えに入れなくてよいことになります。

李義山詩注で最も権威ありとされるのが馮浩の本(十八世紀刊)で、さきごろ新版も出ました。ところでこの連作、馮氏はやはり明確に女性の存在を想定し、さらに女性化作者の妻、そればかりか都長安から東のかた徐州へと旅立つ作者三十八才、とまで特定します。馮氏の義山研究体系に詩がはめこまれるとかくなる次第ですが、上記の原注以外別に確証があるわけではありません。現代中国の義山の専門家たちも馮氏がきめた製作年次に乗ったまま、そのワクの中の考証に熱心です。われわれの班では先ず馮浩から疑うことにしています。

(荒井 健)

幻の辞典を探す

—— 目録学の諸問題班 ——

丁髷を結うときのあの月代というヤツ、剃り上げる部分がちょうど禿げる人のその禿げる部分、つまり頭頂部であるということを使って、通説がその起源を、やれ武士が兜を着けるに当ってその坐りをよくするために剃り上げたのの名残りだとか、やれ鬘付けでべったりと固めるのに対する風通しがその目標であったとかいうのを、いずれも「愚か」だとして却け、指導層のかんりの部分を占めるはずの壮高年の男子たちに見られた禿げそのものの模倣にこそその起源があったのではないかという説がある、いや、あった。

その書物、一九二六年シャーンハイ新民書局発行の『人民大百科』、『大百科』が普通何十冊にも及ぶ冊数を誇るものなら、これは名こそ「大百科」でも、せいぜいが数百ページの、とても千ページにはならない渺たる一冊子といていい。その中の「服装」の項目が旧時代日本の丁髷風俗にまで及んで、その起源を論ずるのである。

署名はたしか「平心」と読めた。

壮高年男子に多く見られる禿げを模倣して、指導層の末席につらなる者、その身分証明として、禿げていない者まで禿げめかして剃り上げる、いわば「おと

な」支配社会の、その支配の座にある者のあかしだと考えようとするのである。驚くべきことだが、この「服装」の項は、その数年前に出版されたある哲学者の著作にまで目をくばってこういうのだ、「男も化粧をした時代には鬘はそれがなくては困る人々に対するすべての人々の礼節であった」とアランはいうけれども、われらが丁髷の習俗について、いまはかれに従う必要がないであろう、と。アランは桑原武夫訳をつかった。『諸芸術の体系』第二巻舞踊と化粧についての第七章、流行について、の中に見える。丁髷を論じてかくの如きに至る者あることを、寡聞にして私は他に知らないのである。

……という説があった、と書いた。

神田の古本屋街で三十年も前、ある店頭に積まれた安本の山の中にそれはあった。大して気にも留めずに店先を離れ、数日後妙に気になって再び訪ねたそこには、もう無かった。

方々の書目を繰って私は、つい中国製辞典の項目を開いて見る。そこでもこの辞典の名は、ついぞ見当らない。表紙の厚紙のくすんだ色と手ざわりまでが、いまでも私の目の底、指先にはのこっているように思えるのに。

(尾崎雄二郎)

黄帝内経太素

——古代中国の科学班——

『黄帝内経太素』『黄帝内経素問』などという一群の書は、通常『太素』『素問』などと呼ばれている。書名の黄帝内経の四字は『漢書』藝文志に載っている『黄帝内経』に由来していることを示すものといわれているが、『黄帝内経』との関係については明らかでない。しかし『太素』が『素問』と『靈樞』を合わせた形になっているように、これらの書が同一系統のものであることは明らかである。そこで少しまぎらわしいが、ここではこれらを黄帝内経と総称することにす

る。黄帝内経は中国医学では経書ともいふべき存在で、中国の医学思想はこの一群の書を研究することによって形成されて来た。なかでも『素問』は唐以後、一般の文化人にも広く読まれて論じられ、医学思想だけでなく、他の分野にも大きな影響を残した。経書であるからには注釈書があるが、その数の多いことが示すように、黄帝内経には非常に難解な部分があり、最近明らかになった七損八益のように、こじつけともいえる解釈も行われて来た。しかし近年、新出土資料、特に馬王堆医書との比較研究によって、これらの書の成立過程がかなり明らかになり、それを念頭において眺め

れば新しい解釈ができるのではないかという期待が持てるようになった。

現在、科学史の研究会で検討している『太素』は、中国では北宋ごろに失われてしまった書で、現存するのは仁和寺所蔵の写本だけである。仁和寺本は一昨年に影印本が出版されるまでは見るのが困難であったため、研究会では蕭延平本の人民衛生出版社影印本をテキストとして選び、のちに仁和寺本と対比しながら進むことにした。その結果、蕭本の改変の個処が明らかになるとともに、通常なら見逃してしまうような部分も目につくようになった。例えば淵の字は蕭本ではすべて泉に改められているのに、仁和寺本では本文は淵で楊注だけが泉になっている。同様なことは丙、世、民についても見られる。

『太素』はこれまで全体の三分の一程度を読んだだけであるが、注も含めて詳しく検討してみると、色々のことが少しずつわかって来た。楊上善は唐人と考えた方がよさそうで、かなり道教的な色彩を持っていたようである。彼の注は必ずしも当を得たものとはいえないが、『太素』の文を一字もゆるがせにしないで解釈しようとしていることがわかり、『太素』の内容とともに彼の思想も注目する必要がある。それとともにどうして『素問』がよく読まれて『太素』が無視されたかということも今後検討に値する重要な問題であろう。

(赤堀 昭)

旅

海の風景

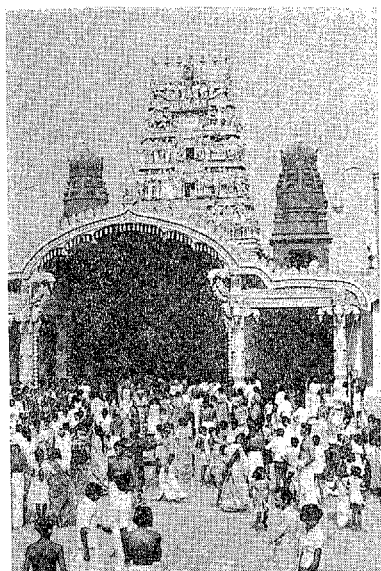
井 狩 彌 介

スリランカは、北海道より小さな熱帯の島国である。巨大なインド亜大陸の半島部の南端に、しばらく出された一滴の雲のように海に浮んでいる。かつてのアラビヤやヨーロッパの遠洋貿易の商人達には宝石と香料との、イギリスの植民地になつてからはセイロン紅茶の産地として知られてきた。私には宝石はまず縁がないが、香料と紅茶の方は、毎日のカレー料理とミルク紅茶でいやというほど付合わされた。

ここに滞在中は、たいてい北部のタミル地域の村で過ごした。多民族国家のこの国の二大勢力は、人口の三分の二強を占めるアーリア系のシンハラ人と、四分の一弱のドラヴィダ系のタミル人とであり、宗教の上では、前者が上座部仏教、後者がヒンドウ教とほぼ明確に色分けされている。私はどちらかといえば、ヒンドウの人々の暮らしぶりをみたかったのでタミル人の間に逗留させて貰っていたわけである。

私たちが借りていた家は海の近くにあつて、昼飯どき

になると、海岸に面したレスト・ハウス（公営の食堂兼宿屋）で落ち合つて、ココヤシにふちどられた遠浅の光り輝く海を水平線を眺めながら辛いカレーを食べるのが日課だった。そういうある日、ふと気がついたのだが、この美しい海で泳いでいるひとをついぞ見かけない。時々、漁師が小舟を出して手網を打っている風景だけで、たまに子供が波打ち際で水遊びをしている程度である。週末や休日でもこの事態は変りがない。但し、遠浅の美しい海岸線、白い砂浜ときたらすぐ海水浴と連想するのはこちらの勝手な思いこみかも知れない。それにしても、少しぐらい若者たちが泳いでいるのが自然ではないだろうか。



ヒンドウ寺院の大祭（ナルール・カンダサーミ寺院、ジャフナ）

ある土地のひとの説明では、海に入ったりすると、カーストの低い漁師達と同じにみられるから一般の人は海で泳がないのだというのだが、どうだろうか。海水浴を温泉のように病気を癒すために使っているのはいくつかの場所のみだ。

しかし、私にとって、この地のヒンドウの人々の海とのかかわり合いで印象深かったのは、死者に関する儀礼のいくつかの場面である。たとえば、葬送儀礼のとき、火葬にした灰を、翌日に死者の長男が頭上にささげ、海辺の特定の場所から後向きに歩いて水に入り、その灰を背後の海に投じる。また、夏のある月の新月の日の晩に、キリーマレイの海辺で、その一年間に父親を亡くしたひとびとが沐浴する儀礼がある。まだ日の出まえの薄闇の中で、こんなにも思うほどの多くの年恰好もさまざまの男女が、亡父の霊の浄化を願って静かに沐浴する光景には何かしら心を打たれるものがあった。海は死と再生の觀念に結びつくという心がこれらの儀礼の中に生きているのではないだろうか。こう書いてきて、ふと、南西海岸にある首都コロンボで聞いた話を思い出した。まあいとし、空気が澄んで南部の山岳地帯にある霊峰スリ・パーダがみえる春になるときまで、この山の方角から、おびただしい蝶の群れが帯状になって空を埋め、はるかインド洋のかなたに死に行くのだという。それが事実かどうかは判らない。ただ、この話をしてくれた人にとっては、海は死を受け入れてくれる神秘の場所なのであ

る。

日本道士九名中国を行く

麥谷邦夫

福永光司先生を団長とする「日本道教遺蹟參觀團」に吉川、狭間両氏とともに加わって、昨年一〇月二四日から一月一日まで中国を訪れた。

最初の訪問地北京の白雲觀は名だたる全真教の道場であるが、解放後その門は外国人に対して固く閉ざれたままであった。しかし、先年福永先生が駐屯中の解放軍兵士と押し問答の末、僅かにその伽藍配置だけを窺ふことができた白雲觀も、今やすっかり修復がなり、赭壁の色も鮮やかにその雄姿を我々の前に現わした。解放後公式には初めて外国人に公開されたためか、各堂宇毎に二名づつ道士が立って我々を鄭重に迎えてくれた。彼らの年齢は七十歳の老道士から十五歳の少年道士までと予想外に幅広く、就中最後に道士を代表して我々に挨拶した青年道士の精悍な面構えは仲々印象的で、共產主義體制との厳しい緊張関係の下で弱小な道教教団を断固維持してゆかんとする気魄が漲っているように私には思われた。

次いで我々は、白雲觀と並ぶ全真教の西方における拠点樓觀台を訪ねた。古都西安の南西約七〇軒、終南山系

の山懷に抱かれた樓觀合は、政治都市北京に置かれた白雲觀とは打って交わり、豊かな自然の中で落着いた佇を見させていた。出て来た道士の顔つきにも少しも氣負ったところはなく、ただ長く伸びた鬚だけが積み重ねて来た歲月の重みを無言のうちに語っていた。終南山麓で生涯を終えたいという団長の積年の懐いは、この地において弥増に高まりはしたが、結局その願いはかなえられることなく、我々は傷心の団長に率いられて無事次の目的地武漢へと向った。

武漢の長春觀では団長好みの柔かな手をした女性道士らに迎えられ、小南一郎氏と私とは最上の法服を着せて貰って俄か道士へと変身した。その後、廬山近辺の六朝の道教遺蹟などを訪ねてから、我々一行九名は長江を一



昼夜下って南京に着いた。ここまでの約二週間に亙る道教の聖地巡りで、俗臭芬々たる我々も些か「道の不滅」に近附いたのか、それとも道教一元論者をもって任ずる団長の放つ妖気のせいかわ、南京出立の朝、ホテルの食堂の払いを精算しに行った団員の一人は、我々の伝票に記された「日本道士一行九名」の文字を目にして、思わずアッと驚きの声をあげたのであった。

パリの小学校

阪上孝

一〇月二三日 八時半にポントワーズ通りの小学校につくと、校長さんが入口で生徒を出迎えている。生徒が少ないせいもある、校長さんは生徒をよく掌握しているようだ。あいさつをすませて中庭に行くと、子供たちがかけ廻って遊んでいる。二人の娘は不安そうに私たちが離れない。アラブ系の世話好きそうな女の子が近づいてきて、どこから来たの、年はいくつ、フランス語はわかるなどと話しかけてくる。にこにこした顔が私たちをとりまく。覚えのないフランス語で答えていると、さきの女の子がフランス語うまいねと言う。馬鹿にされているようだ。娘たちの緊張も多少とけてくる。ベルがなり、子供たちは担任の先生につられて教室に入る。

昨日の校長の説明では、生徒は一四〇人、通常の五年のほかに、外国人生徒のための入門学級、学習遅れの子供のための適応学級がある。娘の入るのは入門学級で、さまざまな年令と国籍の子供が一〇人ほど属している。

この一週間、子供にとって学校と友達がいかに大か痛感させられた。新しい環境にたいする不安と適応への焦りがうまく発散させられないでわだかまり、姉妹関係がぎくしゃくし、それが家族全体に広がる。外部との交通回路を欠いた小集団の生活はけっして平和でも幸福でもない。

一月二一日 娘たちは学校にかなり慣れ、友達と一緒に帰ってくる。PTA総会に行く。生徒間で人種差別に類したことがあり、校長による事情と方針の説明のち討論があった。しかしアラブ系や東洋系の生徒も多いのに、二〇人ほどの出席者は白人ばかりということが差別的構造を表わしているように思われた。その後、一人の母親がこの小学校から近いアンリ四世中学校になぜ進学できないのかと強い口調で質問した(ようだ)。校長が学区制のせいだと説明すると、男性がかなり興奮して自分のすぐ近くの子供はアンリ四世に通っている、校長の努力が足りないのではないかと言う(ようだ)。やりとりのはげしさに驚くとともに、いずこも同じ進学問題を思う。

六月二〇日 上の娘が学校で筆箱を盗まれたと言うの

で校長に会いに行く。子供の不注意かもしれないが説明しかけると、校長は即座にそれは盗まれたのだと言う。豊かになって所有観念が薄くなったのと離婚と共働きの増加で放任家庭が多くなったために、盗みは結構多いそう。フランスの家庭と学校は子供に厳しいと聞いているがと言うと、それは以前のこと、今や大人が自由を満喫しているのに、学校だけが子供だけに厳しくできませんよ、と校長は半ば昔を懐しむように答えた。

学校は学年末の祭で、町はヴァカンス前の大売出しで浮き立っている。

クシャーン学会のこと

桑山正進

カーブルで五回目のクシャーン学会をひらくというしらせをうけたのが十月はじめて、ひとつきそこそこの準備ままならぬうち、羊のむれとみまごう軍用機のあいまに、DC8は滑りこんでいた。白一色のヒンドウクシユが群青の空と灰色にしずむ下界とのあいだで、みょうにしずまりかえていた。各国が自由に発掘に従事し、たがいに遺跡をたずねあい、歴史の環をつなげようと、熱気につつまれていた七十年代を夢かとうたがう現実がそこにあった。イギリスの研究所が閉鎖されていた。老

所長行方不明、つづく九旬ののち逮捕の発表。六月、カーブルのカラーテレビは彼の自己批判の場をうつしだし、翌日国外追放だったという。研究所はブリティッシュ・アカデミーがこの国と協定して七四年につくられた。イギリスとアフガニスタンとのむかしの確執がとおくにあったのだらうか。だが、もっと肝をひやしたのは、フランス研究所、DAFAの閉鎖だった。思えば、一九二二年インド仏教図像学の泰斗フシェが創開した科学としてのアフガニスタン考古研究は、ここをよりどころとして、受けつがれ、引きつがれて、いまやフランスだけのものではない折にさしかかっていた。蓄積された膨大な土器資料は、整理されたままカーブル博物館の地下室に、そのゆたかな歴史を語りただけであった。蔵書はフランス大使館に梱包されたままである。

学会には、イタリーの発掘責任者タッデイがナポリからきた。いつ発掘が再開されるともしれぬ遺跡の、その番人に毎年給料をイタリー政府から引き出す苦衷を語るのも、その場こそ彼の生命だからだ。六月のイギリス研究所長のテレビをカーブルに居あわせてみていたフスマンが、ストラスブールからきた。かれは、「六十年にわたるフランスのクシャーン研究」を発表した。研究所閉鎖に対するくりごとらしきはひとつもみえなかった。しかし、淡々として一語一語、かんでふくめるそのフランス語。司会のタッデイの沈黙。出席者の大半はアフガン側研究者である。ふと私の耳元となりのインド人老先

生がささやいた。Nothing new、たしかに内容はそうだったかもしれない。だが閉鎖されたフランスが、その年のうち、数ヶ月のうちにひらかれたこのあつまりにわざわざ来て、このような発表をしたのだ。私はフランス世界の、フランス人の、底深いすごみをそこに感じ、自分の国をまた考えていた。そういう状況で学会を成功させようと、最大級の心づかいをみせたアフガン科学アカデミーのひとつとは、だから私たちよりもっとつらい立場にいる。ヒンドウ・クシャに平安あれ。

講演会

。九月二八日

於「中国古代の科学」班

中医研究院医史文献研究室

馬 堪 溫氏

中国医学史研究之過去与現在



お客さま

○六月一二日

国立(台湾)中央図書館漢字研究通訊
中国(台湾)文化大学史学系副教授

蘇 精氏
劉 顯叔氏

○六月二八日

西江大学東亜研究所教授

全 海 榮氏

○七月一五日

上海師範学院講師

郭 豫 明氏

○八月七日

韓国精神文化研究院 大学院長
ほか教授五名、大学院生三五名

金 大 煥氏

○一〇月八日

アテネオ・デ・マニラ大学文理学部長

R. J. Bonnan 氏

○一〇月一五日

中国国家図書館訪日団

〃

副 館 長

李 家 榮氏

〃

弁公室副主任

朱 南 氏

〃

参考部主任

曾 季 光氏

〃

採訪部主任

田 大 畏氏

〃

日文編目組組員

周 蓮 氏

○一〇月五日

中国古典文学者訪日代表团

中国社会科学院文学研究所副所長

鄧 紹 基氏

○一〇月六日

北京大学歴史系教授

周 一 良氏

○一〇月二〇日

中国哲学史研究考察団

中国社会科学院哲学研究所中国哲学研究室

〃

主 任

辛 冠 潔氏

〃

副 主 任

衷 爾 鉅氏

〃

助理研究員

馬 振 鐸氏

〃

研究員

滕 穎 氏

○一月二六日

中国社会科学院代表团

中国社会科学院副院長

劉 国 光氏

〃

外事局副局長

王 剛 氏

〃

哲学研究所々々長

邢 賁 思氏

〃

外国文学研究所々々長

葉 水 夫氏

〃

經濟研究所研究員

汪 敬 虞氏

〃

日本研究所助理研究員

高 增 傑氏

○一二月六日

ソ連科学アカデミー極東研究所日本部長

ボリス・ポスペロフ氏

○一二月一六日

ソ連科学アカデミー極東研究所長

ミハイロフ・スラドコフスキー氏

書いたもの一覧

一九八二年六月～一九八二年二月
(五十音順、●印は単行本)



●浅田 彰

クラインの壺あるいはフロンティアの消滅 現代思想 七月
書評・川本茂雄他編『言語学から記号論へ』

経済メカニズムにおけるインセンティブ 読書新聞 七月二十九日

季刊現代経済 臨時増刊「現代経済学のフロンティア」八月
書評・栗本慎一郎『ブダペスト物語』

朝日ジャーナル 一〇月一日
ゲイ・サイエンス 現代思想 一一月

●浅原 達郎
書評・李済著 国分直一訳『安陽発掘』
えとのす 一八号 八月

●飛鳥井 雅道

●日本プロレタリア文学史論 八木書店 一一月
福沢諭吉とアメリカ 月刊歴史教育 一一月

明治二八年の教訓 「これからの京都」 京都新聞社 一一月
●井狩 弥介

コラムの世界へスリランカの仮面劇へ
「続・民族学の旅」 講談社 七月
闇に舞うスリランカの魔物と神がみ

「世界旅行―民族の暮らし」 5 日本交通公社 八月
ヒンドゥの祭り―悪を打倒す神々の闘い

●スリランカの祭(共著) 4 日本交通公社 九月
●上山 春平 工作舎 九月

●密教の世界(共著) 大阪書籍 六月
●日本文化の明暗(共著) 日本アイ・ビー・エム 一〇月

●戦国の城と庭 創造の世界 四四号 小学館 一一月
●宇佐美 斉 週刊読書人 六月

書評・平出隆『破船のゆくえ』 筑摩書房 九月
●立原道造(近代日本詩人選17)

●小野 和子 翻訳・呉縝華「明清二代における史学の変遷」 東方学 六四輯 七月

●阪上 孝 京都新聞 一〇月二四日
パリの芸人たち 読売新聞 一一月二日

●佐々木 克 維新の道 二六号 七月
農民画家ミレーの時代 「新修大津市史」第五巻 七月

●榎本武揚 廃藩置県 読売新聞 一一月二日

●佐々木 克 維新の道 二六号 七月
「新修大津市史」第五巻 七月

征討軍の発進

●竹内 実

●小説 張春橋（共訳）

十三億の隣人

河上肇と京都の中国留学生

江南 忘帰の雨

私と京劇

日中 この「十年」の意味

京都新聞（共同通信） 九月二三日

中国と日本

「春の童話」とその作者

外地育ち

亡命

中国の人権問題

城壁のなかの瀾熟

●人間 周恩来（共訳）

専機活動

人口

巴金「随想録」書評

●多田 道太郎

ニッポン遠望（九〇一二）

四季つれづれ（六〇三二）

●ことばと響き—多田道太郎対談集—

カーニバル観察記

歴史読本 八月

●田中 淡

●劉敦楨『中国の名庭—蘇州古典園林』（訳）

小学館 七月

臨元禪師と黄檗山万福寺の伽藍・文物

近畿文化 三九四号 九月

日本庭園の思想（座談）

創造の世界 四四号 十一月

中国の建築の屋根をめぐる話

「世界の国シリーズ・16・中国」 講談社 十一月

●谷 泰

異文化間交渉での三つの立場

国際交流 30号 五月

Implications of the Shepherd's Social and Communi-

cation Interventions in the Flock — From the Field

Observation among the Shepherds in Roumania —

in Preliminary Report of Comparative Studies on the

Agri-co-Pastoral People in Southwestern Eurasia II

1980, Research Institute for the Humanistic Studies,

Kyoto Univ.

牧民の家畜管理からみたドメスティケーションの諸相

「Domestication」の生態学と遺伝学

京都大学霊長類研究所 八月

犠牲ヴィクティムの本質と機能—旧約聖書レヴィ記再考—

社会史研究 創刊号 十一月

辺境で出会った人々—日本に牧地はあるか—

●角山 栄

ロンドンのティーン・タイム

京都新聞 六月
サンケイ新聞 六月—七月
筑摩書房 九月
ボイス 十一月

「世界旅行—民族の暮らし」 食べる飲む」

日本交通公社 六月

『おくのほそ道』と時間 季刊ざろん日本文化 六号 七月

歴史教育への提言—歴史教育に生活史を— 月刊歴史教育 八月

食生活と経済発展

「第二九回日本栄養改善学会講演集」 一〇月
現代風俗 '82 一〇月

時計と風俗

●礪波 護

書評・長沢規矩也ほか編『宮内庁書陵部蔵 北宋版通典』

史学雑誌 九一編八号 八月

鑑鏡としての中国の歴史

「世界の国シリーズ・中国」 講談社 十一月

●中村 賢二郎

宗教改革と都市—学説史的整理

比較都市史研究 一卷一号 六月

会報大高 四二号 一二月

●羽賀 祥二

明治神祇官制の成立と国家祭祀の再編

人文学報 五一号 三月

史学雑誌 九一編五号 五月

季報大津市史 No. 21 五月

「新修大津市史」第五卷 七月

●狭間 直樹

武漢シンポジウム印象記—現代中国における辛亥革命

研究・一— 東亜 一八二号 八月

●樋口 謹一

●翻訳・ルソー『エミール』下 白水社 一〇月

トインビーの文明史観 大学と理想 一〇月

●平田 昌司

徽州方言古全濁声母的演變 均社論叢 十二号 一一月

休寧音系簡介 方言 一九八二—四 一一月

●前川 和也

The Agricultural texts of Ur III Lagash of the British Museum (II), Acta Sumerologica No. 4 (1982).

Animal and human castration in Sumer, Part III: More texts of Ur III Lagash on the term amar-KUD, Zinbun No. 18 (1982).

●松井 健

「ナン」と砂糖をいれない紅茶

「世界旅行—民族の暮らし」 2 食べる飲む」 日本交通公社 六月

●麥谷 邦夫

中国古代思想と風

as 一八号 九月

●柳田 聖山

今月のことば 花園 六月—一二月

禅語コーナー 花園 六月—一二月

●中国禅思想史（吳汝鈞訳） 台湾商務印書館 人々文庫 五月

白隠と毒語心経 「般若心経を解く」 大法輪運書 6 六月

山中何の有所ぞ嶺上白雲多し 清泉 七号 七月

壁觀バラモン—禅仏教をゆく・その二 禅文化 一〇五号 七月

吟咏同時

在家仏教 三四〇号 七月

降らずとも笠の用意

読売新聞・夕刊二十六日付 七月

森女の里―今なぜ一休か

京都新聞・八日付 八月

上山春平著「空海」(本のうわさ)

人文 二六号 九月

●一休狂雲集・純蔵主のうた(禪の古典5)

講談社 九月

親鸞と道元

石田充之先生古稀記念「浄土教の研究」

百華苑 九月

壁龕より栢樹子へ―禪仏教をゆく・その三

禪文化 一〇六号 一〇月

寒蛩唧唧樹蒼蒼

清泉 八号 一〇月

●一休狂雲集・夢閑のうた(禪の古典6)

講談社 一〇月

寿塔のデザイナーたち―枯山水より水墨へ―

「日本の美と文化」9 講談社 一〇月

現代史としての道元

思想読本「道元」 法蔵館 一〇月

●山田 慶 児

京都大学人文科学研究所科学史研究室の歴史和近況

科学史訳叢 一九八二年第三輯 七月

●三浦梅園(日本の名著20)

中央公論社 八月

●山 本 有 造

書評・近代日本研究会編『幕末・維新の日本』

社会経済史学 四八巻三号 八月

情報経済史をもとめて

人文 二六号 九月

父のこと 山本安次郎博士喜寿記念文集

「めぐりあい」 一〇月

The Balance of Payments of Taiwan and Korea under
the Japanese Rule Zinbun, No. 18

●横 山 俊 夫

●Japan in the Victorian Mind, 1850-1880: a study of
stereotyped images of a nation, D. Phil. Thesis,
Oxford, limited edition of 4 copies. 九月

●吉 田 光 邦

地方都市の文化を考える 「地方の時代実践シリーズ」 六月

●明の陶磁(監訳)

駸々堂 六月

●吉田光邦評論集 II・III

思文閣 六・七月

倒叙法の歴史を

月刊歴史教育 八月

技術史の一断面

三省堂おっくれっと 六・九月

掛硯と帳箱から

21世紀フォーラム 九月

紙と生活文化

情報 九月

文化のなかの韓国刺繍

「韓国の古刺繍」 一〇月

室町期の日々(3)・(4)

MOA美術 七・一〇月

●京都往来

水墨画 一〇月

ユートピア・ロボット・アート

朝日新聞社 一〇月

日米アートクラフト展 一〇月

秘密結社と日本

「楽叢書2」 一〇月

陶磁用ろくろをめぐって

「東洋の科学と技術」 一〇月

展覧によせて

茶の湯の漆器百年展 一〇月

鉄の伝統

「鉄と私」 一〇月

耽書さまさま

染織α 六・一〇月